

左半側空間無視の評価と治療



吉田 健(よしだ たけし) 京都橘大学 健康科学部 作業療法学科

左半側空間無視 (Unilateral spatial neglect: USN) は右半球損傷患者の約4割に生じる¹⁾と述べられており、臨床で出会う頻度が高い病態である。しかし、USNの発症メカニズムはいまだ解明されておらず、リハビリテーションアプローチも確立していない。このセミナーでは、USNの評価と治療、そして筆者らが行った臨床研究を含め概説する。

USN患者におけるリハビリテーションアプローチの一つとして注意喚起訓練がある。しかし、注意喚起による注視パターンや視覚情報処理機能の変化を生理学的に検討した研究は少ない。そこで、USN患者への注意喚起訓練の効果について探索眼球運動検査を用いて生理学的に検討した。

実験方法として、USNを呈する左片麻痺患者6例（平均年齢：63.3±5.4歳、BIT：102±12.5点、MMSE：28.3±0.9点）を対象とした。探索眼球運動検査はアイマークレコーダー（nac社、EMR-8）を装着し、2m前方のスクリーンに提示図を投影して見せた。課題は、正円課題1、探索課題、注意喚起訓練、再確認探索課題、正円課題2の順とし、各々15秒間提示した。提示図と指示は、正円課題では「どのような図形かよく見てください」と指示した。次の探索課題では108個の妨害図形（三角）と9個の目標図形（四角）を均等に配置した図を見せ、被験者に「四角がいくつあるか数えてください」と指示し、回答した四角の個数を課題回答数とした。注意喚起訓練では探索課題と同様に行い、注意喚起は「左側をよく見てください」と一定の音量で15秒間、繰返し注意を促した。再確認探索課題では探索課題と同様を行った。最後に、再び正円課題を行った。正円は角や端がないため注意の配分や持続が難しく、学習効果が少ない提示図である。そのため、注意喚起訓練による注意の配分や持続の効果を反映する課題であると考え、探索課題の前後にコントロール課題として用いた。解析は、平均停留時間、総移動距離、注視点数、課題回答数とした。

なお、本研究は、国際医療福祉大学倫理審査委員会の承認を得て、被験者には口頭と書面で説明し、同意後に実施した。

注意喚起訓練前後の探索課題での比較は、注視点数は5症例が増加、総移動距離は6症例全員で延長した。平均注視時間は4症例が短縮した。また、左右注視点数では6症例全員で左側の注視点数が増加した。正円課題の比較では、3症例で注視点数増加、4症例で総移動距離延長が認められた。課題回答数は、6症例全員で増加したが、課題回答数と注視軌跡がマッチした症例は3名であり、残り3名は標的図形を注視しているが回答数が誤っていた。

探索眼球運動という生理学的指標により、USNに対する左側へ注意を促す口頭指示による注意喚起訓練の効果が示唆された。しかし、効果の持続性が認められない症例もあった。

注意喚起訓練後のコントロール課題である正円において、注視点が広がった症例は探索課題の注意喚起の訓練効果が反映したと推察された。しかし、注視点の変化が認められなかった2症例は、探索課題では注意喚起に対する即時的反応はできるが、その訓練効果の持続が認められなかつたと考えられる。

USNは病巣や症状に個別性が強いことが認められているため、その点を詳細に把握して、個別性を重視した訓練方法を検討することが重要と考える。

1) 石合純夫：BIT行動性無視検査日本版、新興医学出版社、東京、1999